

# 日本語と韓国語の談話における 間投詞の出現様相と機能

金 珍 娥 (きむ・じな)

## 目 次

1. 研究目的
2. 間投詞の捉え方
  - 2.1. 先行諸研究に見える間投詞
  - 2.2. 談話研究における間投詞の先行研究
  - 2.3. スピーチレベルの観点からの間投詞
  - 2.4. 間投詞の概念規定
3. 〈初対面同士の会話〉から〈間投詞〉を見る
4. 間投詞の出現様相
  - 4.1. 〈間投詞終止文〉
  - 4.2. 〈純粹間投詞終止文〉の出現様相
  - 4.3. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の出現様相
5. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の注目すべき機能
  - 5.1. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉のあいづちの再帰的用法
  - 5.2. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の間投詞の丁寧化用法
  - 5.3. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の間投詞の緩衝用法
6. 終わりに：〈間投詞終止文〉から見える間投詞の機能

## 1. 研究目的

本稿は、日本語と韓国語の談話を構成する文の文末に注目し、間投詞で終わる文、すなわち〈間投詞終止文〉の出現様相とその機能を明らかにするものである。

「そう」「はい」といった間投詞は、談話分析の分野においては多く〈あいづち〉の研究などの中で言及され、文法論においては品詞分類の中で言及されている。しかしながら、〈間投詞〉について、その出現様相や機能を取り上げた論考は管見では見当たらない。普段使っている、「そうそう」や「はい」、「うん」といったあいづち詞や応答詞など間投詞類について〈どのような形を、どれほど用いているのか〉といった問いが立てられたことはないのである。話し手と聞き手が同じ場に存在するような言語場<sup>(1)</sup>の存在なしでは、現れにくい間投詞こそ、〈書かれたことば〉ではなく、〈話されたことば〉の談話を生き生きと語ってくれる存在だといえよう。

本稿では次のように〈間投詞終止文〉に接近する：

1. 実際の会話に現れる間投詞の形態と分布を調査する
2. 〈話されたことば〉の談話に現れる間投詞の機能を調査する

## 2. 間投詞の捉え方

### 2.1. 先行諸研究に見える間投詞

亀井孝他編著（1996：249）によると、「間投詞」は英語の“interjection”を訳したことばで、現在の国文法用語としては感動詞という用語の方が一般的に用いられているという。「感動詞」について、大槻文彦（1897：210）では次のように定義している：

感動詞（又、<sup>エイタン</sup>詠歎<sup>コトバ</sup>ノ詞）ハ、喜、怒、哀、樂、等、凡ソ、人情、感動スル所アルニ發スル聲ナリ。  
例ヘバ「あな喜ばし、」最も畏し、」樂しきかな、」ナドノ「あな、」も、」かな、」ノ如シ。

また、山田孝雄（1936；1951：367，368）は、日本語に間投詞を認めず、副詞の一種（感動副詞）であると述べている：

今こゝに副詞と稱するは現今のすべての文法家の所謂副詞とは一をならずしてそれらの所謂副詞と接續詞と感動詞の三者を含めるものなり。（中略）今日の文法家の所謂感動詞は西洋文典の interjection（間投詞と譯すべきものなり）にあらずしてなほ一種の副詞たることはその用法上の位置を以て見ても知らるべし。而眞に interjection といふべきものは謠物の嘯詞等をさすべきなり。

日本語の学校文法<sup>(2)</sup>では、「感動詞」と言い、自立語で活用がなく、単独で独立語になる、感動（ああ、うん、あー、え）、呼びかけ（おい、もしもし、さあ）、応答（はい、いいえ、うん）などを表すとしている。

韓国語について、최현배 [崔鉉培]（1937；1994：194）は、「感動詞」と言い、次のように述べている：

느낌씨（感動詞）는 마디（句節）나 월（文）앞에 서어서 그 뒤의 마디나 월을 꾸미는 씨이니：그 뜻이 항상 느낌（感動）을 나타내는 것이므로 느낌씨라 일컫느니라。  
（感動詞は句節や文の前に位置し、その後ろの句節や文を修飾する詞である：その意味が常に感動を表すものであるため感動詞と呼ぶ：引用者訳）

남기심 [南基心]・고영근 [高永根]（1993：64-65, 180-182）は「感嘆詞」と呼び、「独立言」に分類している。韓国語のすべての品詞の中で「自立性が最も強いものは感嘆詞である」と述べ、次のように定義している：

감탄사는 화자가 자신의 느낌이나 의지를 특별한 단어에 의지함이 없이 직접적으로 표시하는 품사이다.

(感嘆詞は話者が自分の感情や意志を特別な単語に頼ることなく、直接的に表す品詞である：引用者訳)

また、感嘆詞を機能別に感情感嘆詞、意志感嘆詞、口癖や言いよどみといった3つのグループに分けている。

一方、「間投詞」という術語は、Hepburn (1886; 1974; 1980: 265)『和英語林集成3版』で“interjection”の訳語として用いられている。

また、L. Bloomfield (1933: 176)の“interjection”について、ブルームフィールド(1965: 229)は「間投詞」という訳語を用いている：

Interjections are either special words, such as *ouch, oh, sh, gosh, hello, sir, ma'm, yes*, or else phrases (*secondary interjections*), often of peculiar construction, such as *dear me, goodness me, goodness gracious, goodness sakes alive, oh dear, by golly, you angel, please, thank you, good-bye*.

(間投詞は、ouch《あ痛い》, oh《オオ》, sh《シーッ》, gosh《チキシヨウ》, hello《もしもし》, sir, ma'm, yesのような特別の単語であるか、あるいはそうでなければ、<sup>フレーズ</sup>句(つまり二次的間投詞(*secondary interjections*))であるかである。<sup>フレーズ</sup>句の場合は時として特殊の組み立てを有する。<sup>フレーズ</sup>句の例は *dear me*《おやまあ》, *goodness me*《あれまあ》, *goodness gracious*《ほんにまあ》, *goodness sakes alive*《ほんにやれまあ》, *oh dear*《おやおや》, *by golly*《おやっ》, *you angel, please, thank you, good-bye* など。(ブルームフィールド 1965: 229, 下線も原著のまま)

亀井孝他編著(1996: 249)では、「間投詞」について次のように述べている：

品詞の一つ。喜怒哀楽など種々の感情や反応、相手に対する働きかけの意志などを、非分節的に表す語。(中略)1語で(主述未分化の)1文となりうるものであり、この点から、間投詞は文相当語(sentence word)と称される

本稿では、感嘆などの人の感情のみならず、亀井孝他編著(1996: 249)が述べる、相手に対する働きかけをする非分節的な要素を、すべて含むものとして、「間投詞」という術語を用いることにする。

## 2.2. 談話研究における間投詞の先行研究

日本語の談話研究において「間投詞」は「あいづち発話」として多く研究されてきた。〈間投詞〉の中で機能的に〈あいづち的な発話〉に注目し、最も早くその定義や形に言及している論考として、杉戸清樹(1987: 88)がある：

たとえば、つぎのような発話。「ハー」「アー」「ウン」「アーソーデスカ」「サヨーデゴザイマスカ」「エーソウデスネー」などの応答詞を中心にする発話。先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話。「エーッ!」「マア」「ホー」などの感動詞だけの発話。笑い声。実質的な内容を積極的に表現する言語形式（たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など）を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話。ここではまとめて「あいづち的な発話」と呼ぶことにする。

その後、あいづち発話に関する多くの定義と機能が議論されている。堀口純子（1991, 1997）、メイナード（1993）の「聞いていること、理解、同意」、ザトラウスキー（1993）の「継続の注目表示」と「発話権の交代が難しいと考えられる箇所で行われる」、水谷信子（2001）の、「ここまでわかったから、次どうぞ」という合図で、いわば「進め」の青信号のようなもの」など、先行研究で共通して言うあいづち発話の機能として、「話し手の話の継続を促す聞き手の機能」を挙げることができる。

また、金珍娥（2004a）では、先行諸研究とは異なる〈turnの移行〉という観点から、あいづち発話の機能について次のように述べた：

あいづち発話は、(1) turn 移行の標識の機能と、(2) turn 誘発機能という2つの機能を担いながら、発話と発話を結ぶ要素として、次の発話がどちらの方向へ続いていくのかという、方向づけを司りつつ、談話のダイナミズムを支える〈生産的な結節環〉(node)となる

〈間投詞〉のこのような応答詞やあいづちの発話としての機能だけではなく、오승진 [吳丞信]（1997）は，“글쎄”（そうですね），“뭐”（なんか），“네”（はい）などのいくつかの間投詞の談話における意味を述べており、串田秀也（2002）は、「うん」と「そう」が「系統的なオールターナティブ」として用いられていることにも注目している。串田秀也（2002：5）は、「日本語話者のくだけた会話において、「うん」と「そう」はもっとも頻繁に用いられる言葉のうちの二つ」であろうと述べ、「数えたことはない」とも述べている。本稿ではくだけた会話ではないが、年齢の差のある初対面同士の会話において「うん」と「そう」を含めた間投詞の使用の様相も究明しようとするものである。

### 2.3. スピーチレベルの観点からの間投詞

金珍娥（2004b：93）では、杉戸清樹（1987）がいう「実質的発話」を〈内容志向発話〉(content-oriented utterance)と呼び、杉戸清樹（1987）がいう「あいづち的な発話」を含め、間埋め (filler)、前置きなど、主としていわゆる談話的な機能を司る発話を〈機能志向発話〉(function-oriented utterance)<sup>(3)</sup>と呼んだ。あいづち発話を含む機能志向発話におけるスピーチレベルを、金珍娥（2002：63, 2004b：93, 2006：109）を修正し、ここでは次のように位置づけておこう：

表1 日本語と韓国語における機能志向発話のスピーチレベルの類型

		(1)文法的な対立項を持つ	(2)語彙的な対立項を持つ	(3)対立項を持たない
		述語である発話	述語を含まない発話	
敬体 (敬意体)	日本語	そうですね, そうですか	はい, ええ, やはり	は, へ, あ, うん 아, 음, 어, 히
	韓国語	그래요? 맞아요.	네, 예, 예	
常体 (非敬意体)	日本語	そだね, そうか	うん, やっぱり	
	韓国語	그래? 맞아	응, 어	

機能志向発話は、スピーチレベルという観点から、(1)文法的な対立項を持つもの、(2)語彙的な対立項を持つもの、(3)対立項を持たぬものの3つの類型に分類し得る。「그래요?」(そうですか)のように、それ自体が述語でもあるあいづち発話は、スピーチレベルの文法的対立項を有するが、述語たりえないものは文法的対立項を有さない。

またスピーチレベルにおいて文法的な対立項を有さないが、語彙的な対立項を有するもの(2)があり、また文法的、語彙的な対立項を全く有さないもの(3)がある。そのうち語彙的な対立項があるもの(2)と、ないもの(3)に分類する。「うん」はイントネーションや音を引くといった音声的条件により、(2)語彙的な対立項を持つものと(3)対立項を持たぬもののどちらにも入り得る。

述語として機能しうる、文法的な対立項を持つ(1)と、述語として機能せず、語彙的な対立項を持つ(2)に属する機能志向発話は、敬体と常体のスピーチレベルを持ちうるわけである。

なお、「へ」、「あ」のように、述語として機能せず、語彙的な対立項も持っていない(3)に属する間投詞のスピーチレベルは、条件によって敬体、常体のいずれにもなりうる。

#### 2.4. 間投詞の概念規定

以上、間投詞に関わる諸研究の定義や機能などを見た。こうした検討を踏まえ、本稿では次のようなものを〈間投詞〉として判断する：

学校文法で感動詞と呼ばれるものを、本稿では〈間投詞〉と呼ぶことにする。感動、呼びかけ、応答といった機能の表現以外にも、「そう」、「なるほど」などのあいづち詞も間投詞として扱う。あいさつことばの「おはよう」、「こんにちは」なども間投詞として扱う。

あいづち詞の「そう」の類については、「そう」、「そっか」のごとく、時制やテンスを持たず、単独で現れている場合は間投詞と見る。「そうです」、「そうですか」など、述語ともなり、文法的な対立項を持つ、いわゆる間投詞的に用いられている機能志向発話を担う単語は、本稿では間投詞として扱わない。それらは他の品詞の単語が機能志向発話として用いられたものと位置づける。

「笑い」は「あ」、「えー」などの一般の間投詞と区別し、位置づける。

以上を前提に、実際の談話に現れる〈間投詞〉の出現様相と機能を検討してゆこう。

### 3. 〈初対面同士の会話〉から〈間投詞〉を見る

本稿では以下の表1の組み合わせの〈初対面同士の会話〉から、〈間投詞〉のすべての出現様相を見る。〈初対面同士の会話〉<sup>(4)</sup>は30代を中心に10歳以上の差を置いた〈目上との会話〉、〈目下との会話〉、そして〈同い歳の会話〉の2人の会話から構成される。

日本語と韓国語それぞれ計28組、異なり人数56人、総56組の112人の談話データである：

表2 日本語と韓国語の初対面同士の会話の組み合わせ

初対面同士の会話							
目下との会話		目上との会話		同い年同士の会話			
30代	20代	30代	40代	20代	20代	30代	30代
男	男	男	男	男	男	男	男
男	女	男	女	男	女	男	女
女	男	女	男	女	女	女	女
女	女	女	女				

こうした談話の組み合わせから、日本語と韓国語の〈間投詞〉のあり方の全体的な類型を見てみよう。

### 4. 間投詞の出現様相

金珍娥(2006, 2009ab)によれば、上記の組み合わせの〈初対面同士の会話〉において日本語は総6,279文のうち〈述語文〉は2,749文、43.8%、〈非述語文〉は、3,530文、56.2%を占めている。韓国語は総4,934文のうち〈述語文〉が2,192文、44.4%、〈非述語文〉が2,742文、55.6%を占める。このように日本語と韓国語の会話の半分以上を〈非述語文〉が占めていることが確認できる。さらに〈非述語文〉の様相を、品詞を基準に分析した結果、〈間投詞系〉、〈名詞系〉、〈副詞系〉、〈接続詞系〉、〈連体詞系〉、〈助詞系〉といった5つの系に分類することができた。

両言語において〈非述語文〉の同様の類型が得られ、なおかつ同じような分布を示している点は、注目すべきである。以下、両言語の品詞別類型とその割合を提示する：

表3 日本語と韓国語の〈非述語文〉の品詞別類型とその割合

	日本語		韓国語	
	文数	割合	文数	割合
<b>間投詞系</b> はい, え, 네, 응	2,559 文	72.5%	1,987 文	72.5%
<b>名詞系</b> 学校, 学校が, 학교, 학교가	693 文	19.6%	582 文	21.2%
<b>副詞系</b> 全然, ちょっとだけ, 전혀, 아직까지	157 文	4.4%	114 文	4.2%
<b>接続詞系</b> だから, 그러니까	27 文	0.8%	47 文	1.7%
<b>連体詞系</b> どういった, あの, 그런, 어떤	17 文	0.5%	12 文	0.4%
<b>助詞系</b> に, が, ने,かも,なんて,なんか	77 文	2.2%	—	—

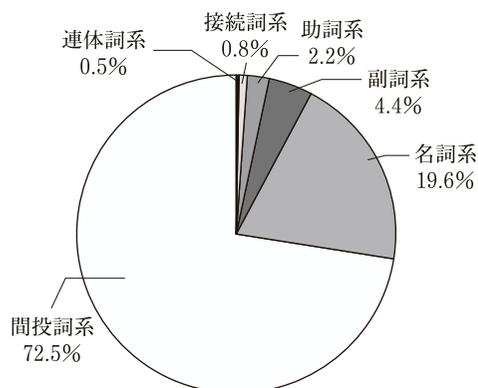


図1 日本語の〈非述語文〉の品詞別割合

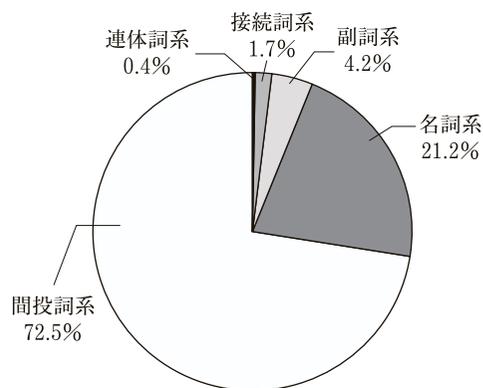


図2 韓国語の〈非述語文〉の品詞別割合

上記の6つの品詞の中で、〈間投詞系〉は、日本語は〈非述語文〉の3,530文のうち、2,559文で72.5%、韓国語は〈非述語文〉の2,742文のうち、1,987文で72.5%を占めている。〈間投詞系〉が両言語とも、72.5%を占め、最も多く現れていることに注目しておこう。

#### 4.1. 〈間投詞終止文〉

金珍娥(2006, 2009ab)でいう〈間投詞系〉とは〈非述語文〉の品詞別分類による名付けである。本稿では談話を構成する〈文〉に注目して間投詞を見るものであるので、〈間投詞終止文〉と呼ぶ：

**間投詞のみで現れている文、もしくは間投詞で締めくくられている文を〈間投詞終止文〉という**

〈間投詞終止文〉には次のような文が含まれる：

純粹

間投詞終止文

- ①同一の間投詞が単独，もしくは複数現れ，1文をなす場合  
「うん」，「うん，うん」，“네”，“네，네”
- ②2種以上の間投詞が連なって用いられ，1文をなしている場合  
「うん，そう」，“아，네”（あ，はい）

ぶら下がり系

間投詞終止文

- ③名詞，副詞，用言類など，他の実詞の後に間投詞がつき，1文が間投詞で締めくくられている文  
「結果出さないと，うん。」  
“고생하죠, 뽀.”（苦勞するんですよ，なんか）

「え，それ何か，デザートみたいなやつ？」のごとく，間投詞で始まり，他の品詞の単語がついている文は〈間投詞終止文〉には含まない。「うん，うん，うん」や「え，え」のごとく，同じ間投詞が連続して用いられて，末尾が間投詞で終わっている場合は，上記の①のグループに入る。②の2種以上の間投詞が連なって用いられている文は，最初に現れた間投詞を代表形にし，〈〇〇系〉と名付ける。例えば「うん」という間投詞が単独で用いられた場合と「うん，そう」，「うん，ま」といった2つの間投詞が1文として用いられた場合，「うん」を代表形とし，〈うん系〉に属するものとする。なお，こうした種類の間投詞の文を〈混成間投詞終止文〉と呼ぶことにする。4.2.4で論じる。

上の①と②のグループは，間投詞のみで現れるので，〈純粹間投詞終止文〉と呼ぶ。

「結果出さないと，うん。」といった，他の実詞の後に間投詞がつき，1文が間投詞で締めくくられている文は〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉と呼び，4.2. で後述する。

上記の表2の〈間投詞系〉には，〈笑い〉が日本語363文，韓国語368文含まれているが，本研究の〈間投詞終止文〉には含めないことにする。

それでは〈間投詞終止文〉は，どのような形がどれほど用いられているのだろうか。まず，上記の①と②の間投詞のみで現れる〈純粹間投詞終止文〉の形態と分布を見てみよう。

#### 4.2. 〈純粹間投詞終止文〉の出現様相

日本語の間投詞のみから成る文，すなわち〈純粹間投詞終止文〉の形態別の分布を見よう。表2の〈間投詞系〉の2,559文のうち，〈笑い〉の363文，〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の9文を除いた，〈純粹間投詞終止文〉の総2,187文における形態分布とその割合である：

表4 日本語の〈初対面同士の会話〉における〈純粹間投詞終止文〉の形態分布

代表系	文数	類 型 例									
うん系	562	うん	558	うん, そう	3	うん, ま	1				
はい系	455	はい	454	はい, お	1						
あ系	390	あ	325	あ, はい	27	あ, そう	13	あ, 挨拶	10	あ, うん	7
		あ, いえ	4	あ, え	3	あ, あの	1				
え系	390	え	386	え, あ	1	え, お	1	え, 挨拶	1	え, うん	1
そう系	120	そう	80	そうか	38	そう, え	1	そう, うん	1		
へ	66										
挨拶	58										
いや系	27	いや	25	いや, いえ	1	いや, そう	1				
その他	119										

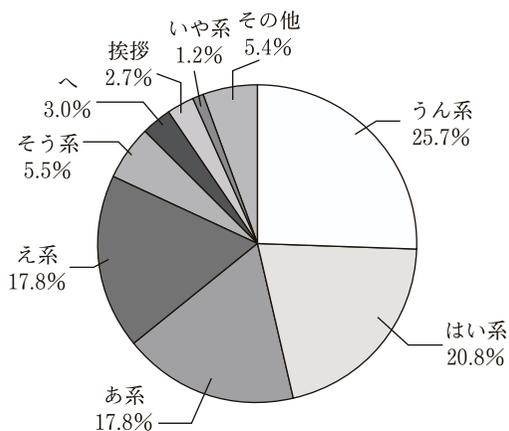


図3 日本語の〈初対面同士の会話〉における〈純粹間投詞終止文〉の形態の割合

表3の〈その他〉には次のような形態が現れている：

「ふん」が23文, 「お」が20文, 「は」が11文, 「や」が8文, 「あの」が3文, 「あら」が1文, 「いえ」が9文, 「うわ」が4文, 「うんと」が1文, 「えと」が9文, 「ほ」が8文, 「まあ」が5文, 「もう」が3文, 「いいえ」が1文, この他に13文

日本語の〈間投詞〉の使用分布は, 〈うん系〉が562文, 25.7%で最も多く用いられ, 〈はい系〉が455文, 20.8%で2位, 〈あ系〉と〈え系〉が同様に390文, 17.8%で3位を占めている。面白いことに, 年齢の差も10歳以上ある, 初対面同士の会話で, 最も多く用いられている間投詞は, 「はい」や「え」でもない, 「うん」なのである。

こうした結果は韓国語と比較することにより, 言語使用の興味深い事実を見出すことができる。

次は, 韓国語の間投詞だけからなる〈純粹間投詞終止文〉の形態別の分布を見てみよう。表2の〈間

投詞系〉の1,987文のうち、〈笑い〉の368文、〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の50文を除いた、〈純粹間投詞終止文〉の総1,569文における形態分布とその割合である：

表5 韓国語の〈初対面同士の会話〉における〈純粹間投詞終止文〉の形態分布

代表系	文数	類 型 例							
예	377								
아系	334	아	315	아, 예	1	아, 네	2	아, 예	16
음系	294	음	293	음, 아	1				
에	234								
네	122								
어系	98	어	97	어, 예	1				
아뇨	30								
하	29								
その他	51								

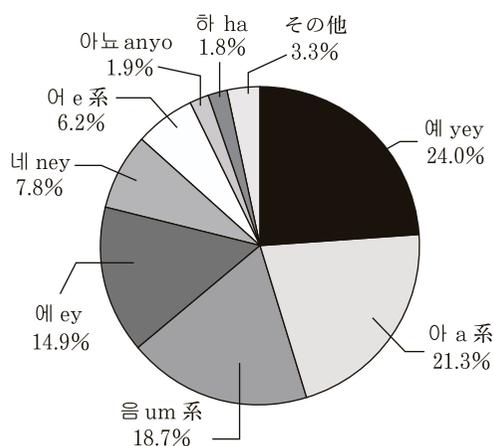


図4 韓国語の〈初対面同士の会話〉における〈純粹間投詞終止文〉の形態の割合

上記の表3の〈その他〉には次のような形態が現れている：

“글쎄”が1文，“그럼”が1文，“글쎄요”が6文，“그럼요”が3文，“뭐”が1文，“크하”が4文，“아이구”が1文，“아이씨”が1文，“아이”が3文，“으아”が2文，“아니”が2文，“어머”が2文，“어우”が3文，“와”が6文，“아휴”が7文，“아휴, 참”が1文，このほかに7文

韓国語の〈間投詞〉の使用分布は、〈예 yey〉が377文、24.0%で1位を占め、〈아 a系〉が334文、21.3%で2位、〈음 um系〉が294文、18.7%で3位を占めている。また、韓国語の文法書や教材などでは扱われていない、敬体の間投詞である〈에 ey〉が234文、14.9%で4位を占めており、敬体で一般に多く用いられると思われる〈네 ney〉は122文、14.9%で5位となっている点も興味深い。

日本語と韓国語の〈間投詞終止文〉のこうした使用分布を対照して見ると、以下のような注目すべき点が浮かび上がる。

#### 4.2.1. 日本語の〈うん系〉と韓国語の〈예 yey〉(はい)

韓国語は語彙的なスピーチレベルの対立項を持ち、最もフォーマルな間投詞である〈예 yey〉(はい)が1位を占めているのに対し、日本語はスピーチレベルの対立項を持たない〈うん系〉が1位を占めている：

日本語の〈うん系〉の間投詞の多用は、初対面であり、年齢の差のある相手に対し、固い雰囲気や和らげ、親しみやすい会話の流れを作ろうとする機能を果たしていると考えられる。韓国語の間投詞の〈예 yey〉の多用は、初対面の年齢の差のある相手に対し、しっかり礼節を守り、より丁寧さを表す機能が窺える。

この点は日本語と韓国語の言語使用の違いをよく示している分布であると思われる。

また、日本語の「そう」「そうか」などの〈そう系〉は90文が用いられているのに対し、文法的なスピーチレベルを持つ「そうですか」などは9文しか現れない点からも、上記の日本語の固い雰囲気や和らげ、親しみやすい会話の流れを作ろうとする間投詞の機能が考えられる。頭の中で考えれば、おそらく初対面の会話では「はい」や「そうですか」などを多用すると考えがちであるが、実情はこのように異なっているのである。

##### [日本語]

30代男	いや、僕の周りとか見てると。 うん。 うん。
40代男	うん、あの面白半分で東京にこれがあるよ、あれがあるよって出かけて

##### [韓国語]

30代男	(はい。子供もいます。 はい。 子供は今三歳です。 はい。) 예. 애기도 있고요. 네. 애가 지금 세 살이요. 예.
40代女	일찍 했네요?. 어. 어. 애가 몇 살이에요?. 세 살? (早かったですね。うん。 あ。 子供は何歳ですか? 三歳?)

丁寧な間投詞の〈はい系〉と〈え系〉は、日本語にももちろん存在し、2位と3位を占めている：

##### [日本語]

30代男	私は最初墨田区、江東区、 で、今中野と。
40代男	え。 あ。 はいはい。 それは私が非常に知ってる地域ですね。

30代男	あ、そうですか。ははは(笑) あ、そうですか。
40代男	えーえーえー。 生まれ育った地域ですね。 え。

4.2.2. スピーチレベルの対立項を持たない、〈あ系〉と〈아 a〉(あ), 〈음 um〉(うん)

日本語ではスピーチレベルの対立項を持たない、〈あ系〉が3位を占め、韓国語も〈아 a〉, 〈음 um〉といったスピーチレベルの対立項を持たない間投詞が、日本語同様、2位と3位を占めている。スピーチレベルを持たない間投詞が談話の中で果たす機能が、両言語同様である点は、大変興味深い結果である。

金珍娥(2002)でも述べたごとく、日本語も韓国語も同様の相手に対してスピーチレベルがシフト(shift)することで、初対面のフォーマルで固い会話の雰囲気親しみを与えることができる。日本語と韓国語の間投詞は、まさにそういう〈親しみを醸し出す〉働きを担っており、敬体間投詞の使用で一貫するよりも、スピーチレベルの対立項を持たない間投詞を用いることで、相手には失礼にならず、会話の雰囲気を親しみやすいものに行っているのである。

[日本語]

40代男	試験対策, 大学ですね, 試験対策がだいぶ熱心なんで, その分その塾代がかからないから		
30代男	うんうんうーん。	ああ。	あー。

[韓国語]

30代男	(ああ。 아아.	はい。 예.
40代男	내 동생도 저 (大学名) 대 교육대학원 다니고 있는데      개는 수학 전공을 했죠. 했는데. (私の弟もあの (大学名) 大学教育大学院に通っているけど彼は数学を専攻したんです。したけど。)	

4.2.3. 打ち消しを表す間投詞 — 「いや」と「いいえ」, 〈아뇨 anyo〉(いいえ) と 〈아니 ani〉(いや) —

日本語では、否定の間投詞は「いや」<sup>(5)</sup>と「いいえ」が27文と9文の97%現れ、「いいえ」は1文の使用に止まっている。日本語では「いいえ」という明確な否定の間投詞をほとんど用いていないのである。これに対し、韓国語では、「いいえ」の意味を持って明確な打ち消しを表す、〈아뇨 anyo〉<sup>(6)</sup>が30文、94%用いられ、「いや」の意味を持つ、打ち消しの間投詞〈아니 ani〉は2文しか現れない。日本語と韓国語はこのように相反する結果を見せている。打ち消しを表すこうした間投詞の、日本語とは対照的な結果にも注目したい:

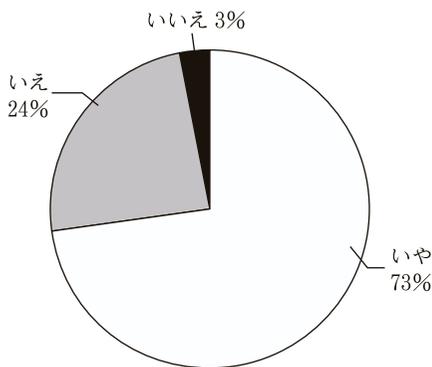


図5 日本語の打ち消しの間投詞の使用率

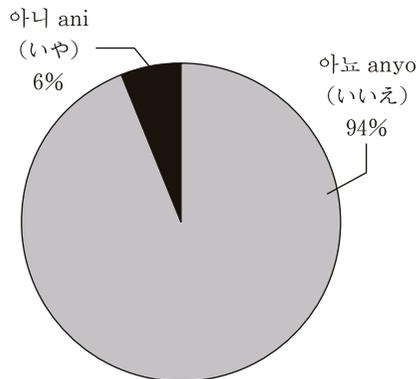


図6 韓国語の打ち消しの間投詞の使用率

[日本語]

20代女		いや。(大学名)なんですけど。大学生です。
30代男	あの一学校名出さなくていいんで、短大生か何かですか？	四大ですか。
20代男	あ、東京ですね。	いや。けっこう東京ですね。はは(笑)。
30代女	と、東京ですか。　　と、あ、び、微妙に東京じゃないみたいな。	はは(笑)。

[韓国語]

30代女	(今なんかボーイフレンドはいらっしゃいますか。あは。　　ははははは(笑)) 지금 뭐 남자친구 있으세요?.　　어허.　　으하하하하(웃).
30代女	아니요. 너무 가슴 아픈 얘기를 하시네. 하하하하(웃). (いいえ。とても胸が痛くなる話をしていちゃるのね。ははは(笑))
30代男	(子供は女房が育てています。え。　　いいえ。今あの何ヶ月も経っていません。) 애는 와이프가 키워요.　　예.　　아뇨. 지금 한 몇 개월 안 됐어요.
40代女	어어. 오래 됐어요? (あ。　　もう長いんですか。)

〈初対面同士の会話〉において日本語の「いいえ」は、話し手の心理的負担が大きくなる否定の表現なのであろう。「いいえ」より「いや」の使用率が圧倒的に高い。「いや」は文を言い切っていないように見せかけることで、否定の意思をより婉曲に示すのであろう。

これに対し、韓国語は明確な否定の意味を表す〈아뇨〉(いいえ)が最も多く用いられている。その理由は2つ考えられる。1つは、スピーチレベルが敬体ではない、〈아니 ani〉(いや)を使うことを避け、敬体の間投詞である〈아뇨 anyo〉(いいえ)を用いることで、丁寧さや礼儀を守ろうとする働きが考えうる。2つ目は〈아니 ani〉(いや)という文を言い切っていないような、あいまいな言い方は礼に欠けるので、〈아뇨 anyo〉(いいえ)と明確な言い方をすることで、礼を尽くそうとする働きが考えられる。いずれも丁寧さや礼節を示すためのものである。

また上の例の日本語をみると、こうした「いや」などを導く質問文の方も、遠回しの婉曲な表現になっている。これに対し、韓国語の質問文はかなりストレートな表現となっており、答えも明確な否定の表現を用いている点が面白い。

4.2.4. 〈混成間投詞終止文〉 — 「あ、はい」と〈아, 예 a, yey〉(あ、はい) —

日本語と韓国語で間投詞のいま1つの大きな表現の違いは、「うん、そう」「あ、はい」のごとく、異なる間投詞を続けて発し、1文をなす、〈混成間投詞終止文〉に現れる。

〈混成間投詞終止文〉は、日本語には81文現れ、韓国語には22文現れている。また日本語に関する表2と韓国語に関する表3を対照してみるとよくわかるように、日本語は韓国語よりその種類も多く、豊富である。日本語の間投詞は異なる間投詞との密着性が強いものと考えられる。

[日本語]

20代女	カリキュラムが変わった。何か、モジュール制か何かの関係で。 変わったんだよね。
20代男	あー、はいはい。 そっか。

[韓国語]

20代女	(ああ、はい。 아, 예예.)	ははは。 하하 (웃).	あ、ほんとはですか? 아, 진짜요?.
20代女	막 난리를 쳐요. 예가. 미친듯이. 그래 가지구, 다시 다른 데 갔다 줘 버리구. 하하 (웃). (さわぐんですよ、その子が。狂ったように。それでもって、また他のところに持ってっちゃって。ははは)		

#### 4.3. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の出現様相

これまでは間投詞のみで現れる〈純粹間投詞終止文〉における形態分布を調べた。

ここでは4.1.で前述した③のグループである、「結果出さないと、うーん」といった、〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の形態分布とその機能に注目したい。

金珍娥(2009b)では、述語で一旦終わった文の後ろに、「なんて」、「なんか」、「え」のように、副詞類や間投詞類、名詞類が特定の意味を持たず〈ぶら下がり〉、述語の統合性を失わせる類型の文を〈ぶら下がり文〉と名付け、〈緩衝表現〉の機能を果たす文であることを明らかにした。これを踏まえて、本稿が言う〈間投詞終止文〉は次のようなものである：

- ① 述語を伴わない非述語文、すなわち自立した名詞や副詞の後ろに、間投詞がぶら下がる文  
「一回以上は、はい」, “뭐 일단 예” (lit. まあ一応、はい)
- ② 述語で一旦終わった文の後ろに、間投詞がぶら下がる文  
「結果出さないと、うーん」,  
“그렇게 멀지는 않구, 예” (lit. そんなに遠くはなく、ええ)

他の品詞に間投詞がついている、こうした①と②の文を〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉ということにしよう。

〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉を取り出して考察することで、間投詞はどういった品詞に続いて現れ、その場合どのような機能を果たしているのかといったことがわかる。自立語である間投詞が単独で現れる場合以外の、文のあり方や間投詞の機能に迫ることができるわけである。

それでは〈非述語〉と〈述語〉の後にぶら下がる、間投詞の種類と頻度を見てみよう：

表6 〈非述語文〉と〈述語文〉の後に間投詞がつく〈間投詞終止文〉

	日 本 語		韓 国 語	
	間投詞	文 数	間投詞	文 数
非述語文+	はい	2	뭐	10
	そう	1	예	6
	え	1	참	2
	うん	1	에	1
			뭐, 예	1
			음	1
			네	1
計 5		計 22		
述語文+	え	1	뭐	16
	うん	2	에	5
	間投詞+助詞	1	예	3
			응	2
			참	1
			글쎄요, 뭐	1
計 4		計 28		

〈非述語〉の後に間投詞がぶら下がる〈間投詞終止文〉は、日本語は「結局増える時期, え。」や「一回以上は, はい。」といった文が計5文現れ, 韓国語の“뭐 일단 예”(lit. まあ一応, はい)“일학기 예”(lit. 前期, はい)といった文が計22文現れている。また〈述語〉の後に間投詞がぶら下がる〈間投詞終止文〉は、日本語は「結果出さないと, うん」といった文が計4文現れ, 韓国語の“그렇게 멀지는 않구, 예”(lit. そんなに遠くはなく, ええ)といった文が計28文現れている。

〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉は、日本語より韓国語のほうに多く現れ, 間投詞による韓国語特有の会話スタイルを構築している

## 5. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の注目すべき機能

〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉, すなわち〈非述語〉や〈述語〉の, 他の実詞の後に現れる間投詞には, 以下の3つの機能が確認できる:

- ① 話者自身の発話に対するあいづちの機能

…あいづちの再帰的用法

- ② スピーチレベルが常体で終わっている以前の部分に続けて, 敬体の間投詞を用いること

で、当該の文を敬体の文とする機能

…間投詞の丁寧化用法

③ 文の最後に間投詞を用いることで、当該の文をソフト化させる緩衝機能

…間投詞の緩衝用法

これまでの間投詞については、〈単独で現れる間投詞〉に対し、感動、呼びかけ、応答、あいづち、あいさつ、掛け声といった機能や働きが述べられてきた。本稿が提示する、間投詞が文の最後に位置することによる上記の3つの機能は、文法研究、談話研究を問わず、これまでほとんど議論されてこなかったものである。

以下、日本語と韓国語の例を見ながら、その類型と機能を見てみよう。

5.1. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉のあいづちの再帰的用法

〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉をなす間投詞の注目すべき1つ目の機能は、話者が自分の発話に対しあいづちを打ち、発話を終了させる機能を果たしているものである：

〈日本語〉

〈非述語〉+間投詞

30代男	それ一番いやですよ。 <span style="float: right;">あうん。 そっか。</span>
30代男	うん、 <u>やっぱプレッシャー、そう。</u> <span style="float: right;">うん。 1年2年かけて。</span>

〈述語〉+間投詞

30代男	でもけっこうプレッシャーでしたね。 <span style="float: right;">えー。 えー。。</span>
30代男	結局だから <u>あの結果出さないと、うん。</u> <span style="float: right;">ま、あの一、何年も</span>

上記の2.2でも述べたように、本来あいづち発話の機能は、「話し手の話の継続を促す聞き手の機能」である。「相手の話に対し、わかった、次をどうぞ」といった信号であるという見解が、先行研究が述べてきた働きである。

ところが上の例では、「やっぱプレッシャー、そう。」「あの結果出さないと、うん。」のごとく、話者が自分自身の発話の後に「そう」や「うん」といった間投詞を使い、あいづちを打っている。

言わば、自分自身の発話にあいづちを打っているわけである、こうした間投詞の機能を本稿では〈あいづちの再帰的機能〉と名付ける。

〈韓国語〉

〈非述語〉 + 間投詞

20 代女	(うん。 응.	ええ, そうです。 어-, 맞어요.
20 代女	근테 이태리로 갈지 아님 요즘 너무 영어 안 되면 안 되니까 영어쪽으로 갈지 잘, 응. (だけど イタリアに 行くか でなきゃこのごろ英語がすごくだめだといけないから 英語の方に 行くかよく, うん。)	

〈述語〉 + 間投詞

20 代女	(そうですか? 그래요?.	きれいはすごきれいですよ。 예쁘긴 되게 예쁘고
20 代女	아, 스페인이 그 죽기 전에 꼭 가 봐야 할 그런, 나라라고, 응. (あ, スペインがその死ぬ前に必ず行って見るべきそういう, 国だと, うん。)	

〈あいづちの再帰的機能〉は韓国語においても同様に発見しうる。

“영어쪽으로 갈지 잘, 응.” (lit. 英語の方に行くかよく, うん。), “죽기 전에 꼭 가 봐야 할 그런 나라라고, 응.” (lit. 死ぬ前に必ず行って見るべきそういう, 国だと, うん。)といった, 話者が自分自身で納得したり, 確認したりといった表現で, あいづちの〈話者自身の発話に対するあいづち〉と言えるものになっている。

あいづちといえば, 一般には相手の発話に対するものであるという, いわば暗黙の前提があった。しかしながら, こうした〈あいづちの再帰用法〉もまた, あいづちの拡大された用法として, 注目すべきであろう。

5.2. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の間投詞の丁寧化用法

次は, 間投詞の直前が〈非述語〉や〈述語〉の常体で終わっている発話に続いて, 敬体の間投詞を用いることで, 当該の文を敬体の文とする機能を果たすものがある:

〈日本語〉

〈非述語〉 + 間投詞

30 代女	あー, 食中毒とか。	あ————。
40 代男	えー。 あの一食中毒とかあの菌が結局増える時期, え。 そちらのほうがほんとは大変ですね。	

〈非述語〉 + 間投詞

40 代女	ははは (笑)。	あ, やってるっていう
30 代女	異動が激しいので, その度に歓送迎会をやってるので (笑)。 もう月に一回以上は, はい。	

〈述語〉 + 間投詞

30 代女	ただ, その千石, 駅と, あの近くなんだというのがちょっといまちイメージが湧かなくて, えー。	
30 代女	あ, 知ってます? ううん。	そうですね。

これらは, 「菌が結局増える時期」「月に一回以上は」「イメージが湧かなくて」のように, スピーチ

レベルが常体で終わっている発話に、「え」や「はい」といった敬体の間投詞を用いることで、当該の文を〈敬体〉にしている。「えー」や「はい」といった間投詞が発話を丁寧化する働きを見せるのである。こうした間投詞の機能を〈間投詞の丁寧化用法〉と呼んでおこう。

こうした〈間投詞の丁寧化用法〉は韓国語でも見出せる：

〈韓国語〉

〈非述語〉 + 間投詞

20代女	(1学期が終わって行かれる, 終わって? 1학기 때 끝나고 가실, 끝나구?)	うーん。半年ですか? 1年?) 응-. 반년이요?. 일년?
20代女	1학기, 예. (1学期, ええ。	마치고 갈 거예요. 終えて行くつもりです。)

〈述語〉 + 間投詞

40代女	(どこか遠い所からいらっしゃったんですか? 어디 먼 데서 오셨어요?)	うん。 ふふふ。 음. 후후후 (웃).
30代女	저요? 아이, 그렇게 멀지는 않구, 예. 하하하 (웃). (私ですか?いや, そんなに遠くはなく, ええ。ははは。)	

韓国語の例においても“1학기” (lit. 1学期), “그렇게 멀지는 않구” (lit. そんなに遠くはなくて) という常体 (非敬意体) の発話の後に, “예” (え) や “예” (はい) という敬体 (敬意体) の間投詞を用い, 当該の文を〈敬体〉として終止させているわけである。

常体 (非敬意体) の発話に敬体の間投詞を用いることで, 当該の文のスピーチレベルを敬体 (敬意体) として保っている。つまり, 間投詞が待遇法を決定する働きをするのである。

5.3. 〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉の間投詞の緩衝用法

金珍娥 (2009 b : 4) では次のような表現を〈緩衝表現〉と名付けている：

〈緩衝表現〉 (buffering expression) = 「完全な」文としての明確さを失わせ, ぼかしたり, 間接化する, 〈話し手のモーダルな態度〉を示す表現

本稿では, 明確な意味を有さない間投詞が, 〈非述語〉や〈述語〉の直後につき, 〈非述語〉や〈述語〉の明確性や統合性を弱くさせ, 当該の文をソフト化させる, 間投詞の緩衝表現的な機能を〈間投詞の緩衝機能〉と名付ける。まず日本語の例から見てみよう：

〈日本語〉

〈非述語〉 + 間投詞

40代女	ははは (笑)。	あ, やってるっていう
30代女	異動が激しいので, その度に歓送迎会をやってるので (笑)。もう月に一回以上は, はい。	

〈述語〉+間投詞

30代男	でもけっこうプレッシャーでしたね。	えー。	えー。
30代男		結局だから	あの結果出さないと、うーん。 ま、あの一、何年も

上記の例のごとく、「月に一回以上は」や「結果出さないと」を、直後の間投詞である「はい」や「うん」がクッションのように支えている。「月に一回以上は、歓送迎会をやらねばならない」や「結果を出さないと、大変だ」などといった実質的な内容を出さずに、「月に一回以上は、はい」や「あの結果出さないと、うーん。」のごとく、「はい」や「うん」が文を締め括る。こうした「はい」や「うん」といった間投詞は、文の最後に位置することによって、当該の文の負担をソフト化させ、緩衝化する〈緩衝機能〉を果たしているのである。

〈韓国語〉

〈述語〉+間投詞

20代男		(あー、そうですか?) 아-, 그래요?
20代男	군대 가는 애들이 있던데. (軍隊に行くやつらがいたけど。	이래저래 고생하죠, 뭐. あれこれ苦勞するんでしょう、なんか)

〈非述語〉+間投詞

40代男	(今お住まいの所は家はそうすると。) 지금 사시는 데는 집은 그러면 뭐.	
30代男		그냥 일반 다, 다세대 주택 살고 있습니다. (ただの普通の多, 多世帯住宅に住んでいます。)

〈非述語〉+間投詞

30代女	(30 でらっしゃるって? 서른, 이시라구요?)	あ、やめてください。 아, 하지 마세요.	
30代女	예. (はい,	예. 아직 뭐. 하하 (웃). ええ。まだ、なんか…。	아직까진 별로. 오래됐나 봐요? 今までは特に。 長いようですね?)

韓国語において緩衝機能を果たす“뭐.” (lit. なんか) という間投詞は、用言のみならず、接続詞、副詞など多様な品詞について、緩衝機能を果たしているのが特徴的である。

“이래저래 고생하죠” (lit. あれこれ苦勞するんでしょう) “집은 그러면” (lit. 家はそうすると) “아직” (lit. まだ) といった文に、“뭐.” (lit. なんか) といった間投詞がつくことで、当該の文の明確性は失われ、曖昧にされ、ソフト化されるのである。

6. 終わりに：〈間投詞終止文〉から見える間投詞の機能

従来の間投詞研究を見ると、主に「間投詞単独の形」に集中していた。またその述べられている機能

も感動、呼びかけ、応答、あいづち、あいさつなどに留まった。

しかしながら、日本語と韓国語の文末のあり方に重点を置き、談話の中での〈間投詞終止文〉の現れ方を見ることにより、間投詞をめぐる、次のような2つの文の構造類型を見出すことができた：

- ① 間投詞のみで現れる〈純粹間投詞終止文〉
- ② 〈非述語〉や〈述語〉の後に間投詞がつく〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉

こうした2種の文の構造を確認することは、間投詞の新たな機能に接近することを可能にする。まず、①の間投詞のみの〈純粹間投詞終止文〉では、日本語と韓国語の間投詞の、次のような形態の分布や機能が見出された：

- ① 最も注目すべき事実は、日本語はスピーチレベルが敬体か常体かの対立項を持たない“うん系”が使用率1位を占め、韓国語は敬体であり、フォーマルな間投詞である〈예 yey〉が1位を占めている点である。年齢の差のある初対面の相手に対して、日本語は親しみやすい会話の流れを作ろうとする間投詞の親密化の機能が重視され、韓国語は礼儀を守り、丁寧に接するための丁寧化の機能が重視されていると考えられる。
- ② 両言語共に、年齢の差のある初対面の相手に対しても、必ずしも敬体ではない、スピーチレベルが敬体か常体かの対立項を持たない〈うん系〉や〈あ系〉、〈아 a〉、〈음 um〉といった間投詞が高い頻度で用いられている。スピーチレベルをシフトさせることによる、間投詞の親密化の機能が考えられる。
- ③ 打ち消しを表す間投詞が、日本語と韓国語とで異なる様相を見せている。日本語では「いいえ」という明確な否定の間投詞がほとんど用いられず、否定としては曖昧で不明確な表現の「いや」が多く用いられている。韓国語においては明確な否定の間投詞である〈아뇨 anyo〉(いいえ)が高頻度で用いられ、あいまいに否定の意味を表す軽い〈아니 ani〉(いや)はほとんど現れていない。日本語には、否定的な表現は明確に表現しないことで、丁寧さを表すという働きを、間投詞が担うのである。また韓国語では、明確に受け答えをし、礼節を保つことにより丁寧さを表すのに、間投詞が働いているものと考えられる。

次に、②の〈非述語〉や〈述語〉の後に間投詞がつく〈ぶら下がり系の間投詞終止文〉においては、既存の間投詞研究では述べられていなかった、以下の3つの機能を見出した：

- ① 話者自分の発話に対するあいづちの機能＝〈あいづちの再帰的用法〉
- ② スピーチレベルが常体で終わっている文に、敬体の間投詞を用いることで、当該の文を敬体の文とする機能＝〈間投詞の丁寧化用法〉
- ③ 当該の文をソフト化させる機能＝〈間投詞の緩衝用法〉

間投詞のこうした3つの機能は、話し手が、自分自身の発話の文の最後に間投詞を用いることで、得られる機能である。間投詞の注目すべき機能として、強調しておきたい。

日本語と韓国語の談話は、〈述語〉を有さない〈非述語文〉が半分以上を占め、その〈非述語文〉の70%以上を〈間投詞終止文〉が占めている。この使用率も驚くべきであるが、両言語が類型の分布において同様の結果を示している点も、大変注目すべき結果である。談話の中でこそ欠かすことのできない〈間投詞終止文〉のこうした位置づけを、改めて確認せねばならない。併せて日本語教育と韓国語教育の発展のためにも、さらなる研究が急がれよう。

## 註

- (1) 野間秀樹(2008:324)は「実際に言語が行われる場」、「言語が実践され、言語が実現する場」を〈言語場〉(linguistic field)と呼ぶ。
- (2) 中光雄他(2001)を参照。
- (3) 金珍娥(2004b:93)参照。
- (4) 談話データのより詳しい情報は、金珍娥(2006)を参照。
- (5) 本研究に現れた「いや」や〈아니〉(いや)は、文を言い切ったような常体のもではなく、文を言い切っていないような、音を引く形で発話されている。
- (6) ここでは“아니요”も〈아뇨〉に含めている。

## 参考文献

- 大槻文彦(1897)『廣日本文典』東京：私家版
- 亀井孝・河野一郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂
- 金珍娥(2004a)「韓国語と日本語のturnの展開から見たあいづち発話」『朝鮮学報』第191輯 天理：朝鮮学会
- 金珍娥(2004b)「韓国語と日本語の文、発話単位、turn — 談話分析のための文字化システムによせて —」『朝鮮語研究2』東京：くろしお出版
- 金珍娥(2006)「日本語と韓国語の談話における文末の構造」東京外国語大学博士学位論文 東京：東京外国語大学大学院
- 金珍娥(2008)「談話だったりする。—〈話されたことば〉への視座」待遇コミュニケーション学会招待講演資料
- 金珍娥(2009a)「日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相 — 計量的な分析を中心に —」『カルチュラル』第3巻 第1号 横浜：明治学院大学教養教育センター
- 金珍娥(2009b)「日本語と韓国語の文末における緩衝表現」『朝鮮学報』第213輯 天理：朝鮮学会
- 串田秀也(2002)「会話中の「うん」と「そう」— 話者性の交渉との関わり —」『「うん」と「そう」の言語学』東京：ひつじ書房
- 中光雄[国語教育プロジェクト]編(2001)『原色シグマ新国語便覧 増補改訂新版』東京：文英堂
- 定延利之編(2002)『「うん」と「そう」の言語学』東京：ひつじ書房
- ザトラウスキー、ポリー(1993)『日本語研究叢書5 日本語の談話の構造分析 — 勧誘のストラテジーの考察 —』東京：くろしお出版
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつき」『国語研究所報告92 談話行動の諸相談話行動の分析』東京：三省堂
- 野間秀樹(2007a)「試論：ことばを学ぶことの根拠はどこに在るのか」野間秀樹編著(2007)所収
- 野間秀樹(2007b)「動詞をめぐって」野間秀樹編著(2007)所収
- 野間秀樹(2008)「言語存在論試考序説I — 言語はいかに在るか —」野間秀樹編著(2008)所収
- 野間秀樹編著(2007)『韓国語教育論講座 第1巻』東京：くろしお出版
- 野間秀樹編著(2008)『韓国語教育論講座 第4巻』東京：くろしお出版

- ブルームフィールド (1965) 『言語』 三宅鴻・日野資純訳 東京：大修館書店
- ヘボン, J. C. (1974; 1980) 『和英語林集成 第3版』 東京：講談社
- 堀口純子 (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」 『日本語学』 Vol. 10 東京：明治書院
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 東京：くろしお出版
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」 『話しことばの表現 講座日本語の表現3』 水谷修編 東京：築摩書房
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」 『日本語学』 Vol. 7 No. 12 東京：明治書院
- 水谷信子 (2001) 「あいづちとポーズの心理学」 『言語』 Vol. 30 No. 7 東京：大修館書店
- 水谷信子 (2001) 『日英比較 話しことばの文法』 東京：くろしお出版
- メイナード, K. 泉子 (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」 『言語』 Vol. 16 No. 12 東京：大修館書店
- メイナード, K. 泉子 (1993) 『会話分析』 東京：くろしお出版
- メイナード, K. 泉子 (1997) 『談話分析の可能性：理論, 方法, 日本語の表現性』 東京：くろしお出版
- メイナード, K. 泉子 (2000) 『情意の言語学 — 「場交渉論」と日本語表現のバトス —』 東京：くろしお出版
- メイナード, K. 泉子 (2004) 『談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』 東京：くろしお出版
- 山田孝雄 (1936; 1951) 『日本文学概論』 東京：寶文館
- 고영근 [高永根] (1999) “텍스트이론—언어문학통합론의 이론과 실제” 대우학술총서논저 서울: 아르케
- 국립국어연구원 [國立國語研究院] (1999) “표준국어대사전” 서울: 두산동아
- 김석득 (1992) “우리말 형태론” 서울: 탑출판사
- 김태자 [金泰子] (1987) “말화분석의 화행의미론적 연구—어학의 문법에로의 접근—” 서울: 탑출판사
- 남기심 [南基心] (2001) “현대 국어 통사론” 서울: 태학사
- 남기심 [南基心] · 고영근 [高永根] (1993) “표준 국어문법론 개정판” 서울: 탑출판사
- 서정수 [徐正洙] (1996) “국어문법” 서울: 한양대학교출판원
- 연세대학교 언어정보개발연구원 [延世大學校 言語情報開發研究院] (1998) “연세 한국어 사전” 서울: 두산동아
- 오승신 [吳丞信] (1997) ‘담화상에서의 간투사의 기능’ “말” 제 22 집 서울: 연세대학교 연세어학원 한국어학당
- 이원표 (2001) “담화분석” 서울: 한국문화사
- 이익섭 · 임홍빈 [李翊燮·任洪彬] (1983) “국어문법론” 서울: 학연사
- 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 언어 문학 연구소 사전 연구실 편 (1962) “조선말 사전” 東京: 학우서방
- 최현배 [崔鉉培] (1929; 1937; 1994) “우리말본” 서울: 정음문화사
- 허웅 [許雄] (1975) “우리 옛말본 15 세기 국어 형태론” 서울: 샘 문화사
- Bloomfield, L. (1933) *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston
- Hepburn, J. C. (1886) *Japanese-English and English-Japanese Dictionary*. Third Edition Tokyo: Z.P. Maruya